

## 参考資料(一) 東京大学史史料に関する提案二東

### 解説

ここには三点の文書が収められている。

(1) 東京大学史史料センター(仮称)設置の提案(昭和六十年三月二十六日)

(2) 東京大学百年史編集室収集史料の措置について(昭和六十年十月一日)

(3) 「別紙」東京大学百年史編集室主要寄託文書一覧(昭和六十年九月)

これらは、いずれも東京大学百年史編集室の専門委員四名(寺崎昌男・教育学部教授、伊藤隆・文学部教授、稲垣栄三工学部教授、益田宗史料編纂所教授)の手で纏め、平野龍一前総長および森亘総長に提出したものである。

専門委員の手でこれらの文書を纏めることができた背後には、いうまでもなく、これまでの百年史編集期間に史料の寄託を惜しまれなかった関係各位の御意がある。と同時に、全学編集委員会の席上や個人的な意見交流の機会に、東京大学史史料の保存と活用を説かれる学内外の専門家、関係者の声があった。

何らかの適切な措置がとられることを念じつつ、ここに、編集室関係資料の一つとして、参考までに収録する。

またこれらの文書とくに(1)の提案の基礎をなしているのは、前室長土田直鎮教授の在任時代に、同教授を中心として行われた学内共同研究「東京大学関係資料の保存と利用に関する予備的研究」(昭和五十六・五十七年度)の成果である。

右の共同研究報告書の一部も参考資料(二)として本号に収められているので、併せて参照していただければ幸いである。(寺崎昌男)

### 一、東京大学史史料センター(仮称)設置の提案

東京大学史史料センター(仮称)設置の提案

昭和六十年三月二十六日

東京大学百年史編集室専門委員会

総長のもとに「東京大学史史料センター」(仮称)設置に関する懇談会を開設されるよう提案する。

#### I 設置提案の理由

一 本学の本部各局には、数万点におよぶ沿革史料、行政資料、その他の非現用公文書類が存在している。また諸学内審議会の議事記録、学内諸事件に関する記録類も保管されている。それらはずべて、本学の沿革史資料であるに止まらず、近代日本の文化史、学術史、教育史、行政史上の重要基本史料をなすものである。

それらの体系的収集、整理、利用がはかられるならば、学術上、行政上、多大の貢献裨益をなすことが期待される。

二 東京大学百年史の編纂作業を通じて、百年史編集室には、加藤弘之文書をはじめとする旧総長、関係職員の見書、記念物等数千点が寄託され、遺族等からは将来本学に寄附してもよいとの同意が与えられている。しかしこれらの史料はまだ整理、保存の体制はとられておらず、編集室解散の際には散逸の可能性が極めて大きい。

三 本学には過去百年の歴史において、約四千人の教官が在籍し、大学を基盤として数多くの研究成果を上げ、近代日本学術文化の

中心部分を形づくってきた。また、現在および将来においても教官スタッフによる研究が続々と発表されるであろう。

四 以上の諸史料・情報の収集、整理、保存、利用については、現在、下記のような問題がある。

① 沿革史料等については、百年史編集作業の中で所在確認や一部の目録化等の作業が進められているものの、なお系統的な整理、保存、利用には程遠い事態にある。

加えて、主として行政上の必要に応じて保存されてきたため、保全の配慮に欠けるだけでなく、人事異動、庁舎の移転、部課の改編統合等により、散逸あるいは廃棄等の危険に絶えずさらされている。

② 百年史編集室に保存、寄託されている文書については、同室が恒久的な機関でないために、正式の寄贈をうけることができず、『東京大学百年史』刊行後は再び散逸する可能性が高い。

③ 本学教官の研究成果については、その題目、概要、沿革等を文献情報化し、国内・国外からの検索の要望に応えることが重要であり、また日本近代学術史研究の基礎データともなるであろう。しかし、現在何等の全学的措置が講じられておらず、学内・学外との学術交流上重大な支障を来している。

五 以上のような事態を打開するために、恒常的な機関として、「東京大学史史料センター」（仮称）を設置し、将来にわたり、東京大学の沿革資料・学術情報の収集、整理、保存ならびに利用をはかる必要がある。

東京大学創立百十周年を控えた現在、この企画を立てるに最も適わしい時機にあると考える。また同センターは、将来の東京大学沿革史編纂の決定的な基礎になるであろう。

なお、百年史編集室を中心とする編纂作業の後身を何等かの形

で強化存置すべきだという編集委員会委員長および専門委員会の提案に対しては、百年史編集委員会（全学）でも強い賛意が表された。

## II 「東京大学史史料センター（仮称）」の概要

### 一 事業および目的

① 東京大学の沿革に関する諸史料、文書、記念的物品等の収集、整理、保存、利用を行う。

② 非現用公文書類の収集、受け入れ、保存を行うと共に、その整理利用に資する。また、学内におけるその所蔵状況等を恒常的に把握する。

公開利用については厳正なルールを樹立するが、学術上の貢献のみならず、行政上の便益にも資するものと期待される。

③ 本学史を中心として日本大学史・高等教育史の学術的研究を推進し、学際的共同研究を組織する。大学史研究紀要の刊行、貴重資料の覆刻等も行い、日本の学術史、文化史、一般史の研究に資する。

④ 東京大学の歴史と現状を展示する施設を設け、学内教職員・学生はもちろん、外国からの来訪者の観覧に供する。

⑤ 本学の旧・現教官による研究情報を収集、整理し、基本データ・ベースを作成して、内外からの検索需要に応える。

### 二 性格

① 特定部局に属さない独立センターとする。

② 学内共同利用機関とする。

③ 東京大学総合研究資料館（University Museum）と併立する東京大学文書館（University Archives）としての性格をもつ。

### 三 構成

一部門二室をもって構成する。

① 第一室（沿革史料研究室）

東京大学の沿革に関する史・資料の収集、保存、整理ならびに  
 大学史研究、編纂を行い、あわせて資料の学術的利用に当たる。

② 第二室（学術資料研究室）

東京大学における研究ならびに教育に関する学術資料の収  
 集、整理、保存、利用に当たり、大学学術史に当たる。

四 人員

① センター長

部局教授の併任とする。

② 各室等の構成

第一室 助教授一 助手一 技官一

第二室 助教授一 助手一 技官一

図書室、史料室職員二

事務職員 基準に応じて配置する。

五 管理運営

① 管理責任者は研究部門においてはセンター長とする。

② 運営には運営委員会が当たる。

第一室、第二室ともその充実な運営のためには全学部局の英  
 知が結集され、協力態勢が確立されておく必要がある。全学部  
 局から運営委員の選出をうけ構成する。

六 施設

① 本学を象徴する歴史的施設であり、現在百年史編集室も置か  
 れている大講堂（安田講堂）を本部とすることを希望する。

② なお大講堂内に「東京大学―歴史と現況」の展示コーナーを  
 設置する。

③ このほか、宇宙研跡地利用計画の一環として、公文書保存書

庫を設置することも考えられる。

④ 本センターに適用される基準がないため、「国立学校建設必  
 要面積基準面積表」を参考として概略面積を算定した。

研究室	助教授（二名）	四〇㎡	撮影室	二七
	助手（二名）	三〇	史料閲覧室	三〇
館長室・心接室		二七	機器室	六〇
事務室		二七	会議室・講習室	二七
用務員室・給湯室		一一	展示ホール	一一〇
図書室		三〇	廊下・便所等	一九八
史料収蔵庫		一、〇〇〇		
史料整理室		六〇	合	計一、六八八

七 学内既存部局との比較および異同について

① このセンターは、その機能の一部として保存資料の利用、公  
 開サービス等を行うが、それは専門家の研究に資することを目  
 的とするものであり、学部学生の教育を目的とはしない。ま  
 た、所蔵史・資料の基幹部分は原文書、物品、データ・ベース  
 等であり、図書ではない。したがって、附属図書館とは設置原  
 理を異にする。

② 東京大学附置の史料編さん所は明治維新前の史料を扱って  
 おり、一般史的研究が行われる。したがって、このセンターの活  
 動とはなじまず、同編さん所の一部門として設置されることは  
 不可能である。

③ 総合研究資料館は、標本、資料を対象とする機関であり、文  
 書史料等を主として扱う本センターとは異なる。

先述の通り、Museum に対する archives として別個の性格  
 ・目的をもつ機関である。

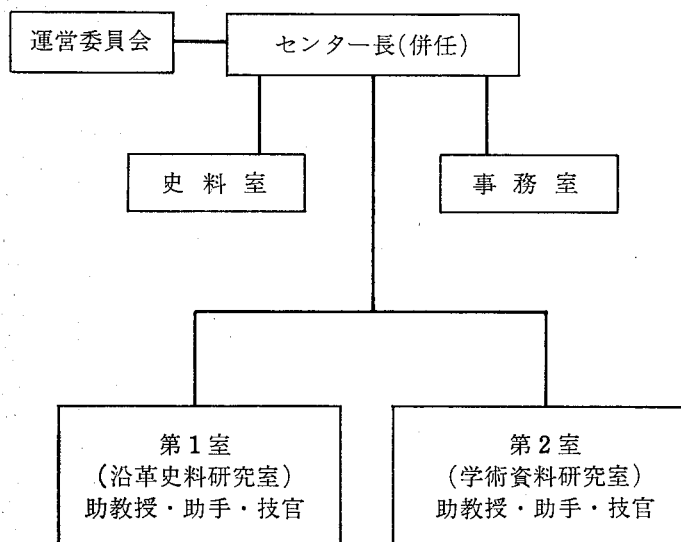
八 追補

① 沿革史資料等の現況および施設利用の現状からみて、本センターの設置は、百年史編纂事業終了後、空白期間をおかず実行されることが必要である。

② 本センターが設置されれば、現在定期刊行中の研究年報『東京大学史紀要』の発行が継続されると同時に、将来沿革史編纂への準備が着手されることにもなる。

(参考)

組織図



参考資料 (一)

## 一、東京大学百年史編集室収集史料の措置について

東京大学百年史編集室収集史料の措置について

さきに私どもは「東京大学史史料センター(仮称)設置の提案」(昭和六十年三月二十六日付)を提出して御考慮を御願ひ致しました。が、東京大学百年史刊行が昭和六十一年度で終了し、それに伴い東京大学百年史編集委員会および同編集室が解散されるであろうと思われる今日、当面緊急な問題として百年史編集の過程で収集した大量の史料・文書を、その解散後どうするかについて苦慮しております。そこでこの問題について、さきの提案をも考慮しながら、私どもの考えを纏めましたので、御考え頂きたいと存じます。

東京大学百年史編纂の過程で、百年史編集室には、加藤弘之文書を始めとして、旧総長・教職員の文書・記念物等数千点が寄託されました。これらは別紙のとおりであります。単に本学にとつて貴重な史料であるばかりでなく、日本の近代教育史・文化史の貴重な史料であり、文化財であります。しかも遺族等からは将来本学に寄附してもよいとの意思が表明されております。しかし同室が恒久的な組織でないため、正式の寄贈を受けることができず、百年史編集室の解散後の措置が緊急な問題となつてまいりました。

振り返って考えますと、東京大学は六十年前、『東京帝国大学五十年史』上下二巻を出版するため、幾多の史料を収集して利用しました。しかし遺憾なことには、その時の史料にして、今日、私どもが編集に利用できたのは、恐らくその半数にも満たなかったように思われます。確かに史料の一部は整理されて図書館に保管されておりますが、図書館に移管される前、既に散逸してしまつた多くの史料の存在を考えねば、あの五十年史の成果はありえなかつたと思われるからです。私どもは、この点に思いをいたすとき、私どもが関係各位の協力

のもとに収集した史料が再び、散逸するという事態は絶対に避けなければならぬと思ひます。

前回提案致しました「センター」ができて、それに引き継ぐことができれば、最も望ましいことでありますし、またそうした貴重な史料を寄託して下さった方々の好意に対しての責任を果たせると思ひます。翻つて、「センター」ないしそれに類する恒久的な責任ある組織ができないとすると、私どもとしては、それを寄託して下さった方々に一切御返却するのが、これら貴重な史料を活かすための止むを得ざる措置ではないかと考えております。これは余りにも残念なことであります。

全十巻の完結が予定されているあと一年半ばかりの間に、何らかの措置を講じなければならぬ状況になっております。あいまいにして、日本の学術史の貴重な財産を死蔵させたり散逸させたりしないために、早急な決定が必要であります。

私どもは「センター」設置が最善の方法とは思ひますが、返却案との間になお様々な考え方があり得ると思ひます。そこで、さきの私どもの提案をも含め、当面の問題としては右の措置をどうするかについて議論する、大学としての意思を決定しうる懇談会なり、委員会なりを早急に設けて頂きたいと考えます。

昭和六十年十月一日

森 亘 総長 殿

東京大学百年史編集室専門委員会

### 三、東京大学百年史編集室主要寄託文書一覧

〔別紙〕

東京大学百年史編集室主要寄託文書一覧

〔昭和六十年九月〕

加藤弘之文書

四四五点

元総長。日記（慶応三年～大正五年）、著訳書（草稿も含む）、辞令、書簡等より構成。東京大学のみならず、日本の学術史に必要不可欠の文書。毎年学内外からの照会が多数あり。

井上哲次郎文書

八九点

元文科大学教授（名誉教授）。日記（明治二十六年～昭和十九年）、講義筆記より構成。井上及び彼をめぐる人々の動静が克明に記され、また読書内容、書籍の刊行、雑誌論文掲載等も逐一記載。明治、大正期の学術史研究にとって貴重な文書。

内田祥三文書

五六五点

元総長。東京大学関係文書、学外各種委員会関係文書より構成。関東大震災以降の本学復興及び昭和戦前、戦中期の本学の動静を知る不可欠の文書。評議会、学部長会議等の際、総長自身が記入した詳細なメモがあり、戦時下の日本の高等教育、科政策を解明する上でも貴重な文書。『東京大学百年史』（通史二）では大いに活用した。

平賀譲関係文書

一九点

元総長。書簡、新聞切抜き帳より構成（複写）。平賀総長時代の「平賀爾学」関係、学内新体制の整備等の動静を窺う上で重要な文書。

小池行松関係文書 四五五点

元教学局勤務。教学局の刊行物及び思想調査書類等より構成。

昭和十年代の思想統制、取り締まりの実態を解明する上で重要な文書。

長与又郎関係文書 一三点

元総長。昭和三年から昭和十三年までの日記（複写）。長与総長時代の本学の動静、特に矢内原事件を初めとする日本における大学の自治をめぐる諸事件の資料としては不可欠な文書（なお、長与の日記は明治二十六年から昭和十六年逝去の前日までのものが現存）。

坪井九馬三関係文書 約七〇〇点

元文科大学教授（名誉教授）。日記（明治三十二年～昭和七年）、書簡、本学関係文書、図書等より構成。明治後半期以降の本学の動静を知る上で貴重な資料。特に大学の教官人事権をめぐる日本の初めての大学自治事件として著名な明治三十六～八年の七博士事件に関する当時の関係者自身が残した詳細な記録としては、中田薫『懐旧夜話』（法学部蔵）と並んで現在のところ稀有の資料である。

蠟山長治郎関係文書 一三三点

明治三十三年法科大学英法卒業。梅謙次郎、穂積八束の講義録。

鶴見求馬関係文書 四点

明治二十三年医科大学卒業。東京大学予備門、医科大学の卒業証書等。

上記のほか、現在整理中の文書に、元総長向坊隆、元総長加藤一郎、元事務局長鶴田酒造雄、元史料編纂所所長永貞三、元理学部助教小堀敏、元学生部長（名誉教授）加藤橋夫等の寄託文書がある。なお、この一、二年、停年退官教授より勤務中の資料を寄託したいという申し出が相次いでいる。